

ひずみ広がるクラシック音楽業界

パイを分ける時代に、官のテコ入れも必要

ジャーナリスト・元浜離宮朝日ホール支配人 **志村嘉一郎**

音楽学校出たけれど

「オーケストラ1名の求人に対し200名以上の候補者がオーデションに押しかけた」と、指揮者の篠崎靖男氏が記している。「世間の求人倍率が1.63倍というのに、オーケストラを目指す人の倍率は0.01倍」ときびしい。文科省の調査では、音楽家を目指す音楽関係大学の卒業生は年間約4,500人、このうち2010年には136人が就職できたと推定、3%の就職率だ。ほかの調査では、音楽大学卒業生が年間約4,900人、短大1,300人、専修学校6,200人、計12,400人が毎年卒業する。全員が音楽家を希望しているわけではないが、音楽家になれるのはごくわずかだ。海外にもイタリアやドイツ、オーストリアに数千人の音楽留学生が行くが、アーチストになれる人は少ない。

音楽を目指して幼少のころから勉学に勤めている人が、あまりにも報われない世界となっている。音楽学校を卒業し演奏家として食べていける人はほんの一握り。ずばぬけた才能があるか、よほど運に恵まれなければ難しい。音楽家の就職先は極端に少ないのだ。

明るくないオーケストラの未来

オーケストラの世界も厳しくなってきた。「危惧されるのはオーケストラの観客が高齢化していること。定期演奏会の会場がガラガラになるのは目に見えている」(片山杜秀・音楽評論家)「東京オリンピックが終わった後、公共予算は介護と子育てに、より集中するようになって、クラシック音楽を助成するお金がなくなり、オーケストラもオペラも立ちいかなくなる」(大友直人・指揮者)「聴衆の高齢化、社会でのクラシックの地位低下に、関係者は危機感をもつ。でも、公の話になると、アウトリーチの『数』の話に還元され、文科省からの助成金がいくらもらえるかという自転車操業的な状況になる……」(片山氏)。『中央公論』30年11月号で「クラシックに未来はあるか」と題する両氏の対談を掲載している。オーケストラの未来も決して明るくない。

音楽公演はマチネの時代

音楽公演はどうか。夜の公演が不入りで昼の公演が盛んになってきた。ランチタイムコンサートやアフタヌーンコンサートの名のもと、昼間の公演に人が集まる。横浜では昼間のコンサートで連続5公演のチケットを売り出したら、バカ当たりし売り切れになるほど。音楽ファ

ンも高齢化が進み、美術館にいく感じでコンサートに行く時代に。夜遅く電車で帰らなくても、昼間のすいている時に出かけ昼食や夕食を食べて帰宅できる。お金は持ってるが健康志向なのだ。いまや、音楽公演はマチネの時代。

音楽プロデューサーも多難

このような状況の中で、音楽プロデューサーや音楽事務所の経営も多難だ。ボランティアに近い活動をしているプロデューサーも少なくない。海外からのアーチスト招聘はドル建てかユーロ建て。円安の現在では、為替相場に一喜一憂せねばならない。「ホール主催の演奏会で『出演料をまけろ』とよくいわれる。『会場貸出料は条例で決まっているのでできない』が、出演料は値切ってくる。さらに『消費税込みで』とも」とマネージャー。官が民をいじめる構図はこの世界でも。

著作権料と貸譜料だけはホクホク

八方ふさがりのクラシック業界だが、著作権料と貸譜料だけは昔からの価格体系でがっぽり徴収している。著作権料は集金した金額の27.5%の手数料を協会がとる。音楽事務所のマネージメント料約15%に比較すれば、いかに高額か。協会は文科省の高官が天下りし同省直轄の外郭団体で、官が民をいじめている構図は同じだ。

貸譜料は作品によって違うが、かなり高い金額。どのような基準で料金をとるのかオープンにされていない。が、価格のわりには借りた楽譜が古くなくて汚い。貸し出す商品は顧客が喜ぶように磨いておくべきではないか。

文化と経済、深まる相互作用

今年は、時代の潮目の年。5月1日から新天皇が即位し新しい元号となる。国際的には米中、日ソ、日韓、EU、中東など予想もつかない展開が起きそう。国内も統一地方選、参議院選挙が続き、衆議院解散同時総選挙もあるかもしれません、結果次第では安倍一強の構図も変わるかも。外国人労働者の流入も解禁され国内経済も流動的。「文化と経済は相互作用があり、文化が政策や経営の重要な要素」という柳川範之東大教授らの研究が、最近注目されている。クラシック音楽も日本経済に大いに貢献しているのだ。音楽ファンが年々減少、縮小するパイをどう分け合うか、公的支援も要請して、音楽業界の潮目の年にする必要があろう。



私の仕事の経歴

本物のクラシックを求めて ヨーロッパの隠れた才能を発掘

株式会社ユーラシック 代表取締役
音楽プロデューサー協会代表幹事 村上雄一

出身は宮城県気仙沼で、昭和30年(1955年)に生まれました。時代はまだ典型的な昭和の時代でした。今日は、私と音楽との関わりのことについてお話しします。

小さいころから音楽好き

家には音楽の環境はありませんでしたが小さいころから音楽が好きで、小学校高学年のとき宮城県で開催された学校対抗の器楽合奏コンクールに出場するメンバーに選ばれて仙台の宮城県民会館の舞台に立ちました。また中学校時代は合唱コンクールに出場するメンバーに選ばれて県民会館で歌ったことがあります。中学のころ地元のレコード店で人生初めて買ったクラシックのレコードが、ブルー・ワルター指揮コロンビア交響楽団のモーツアルト交響曲40番と41番「ジュピター」で、特に40番は家で何度も繰り返し聴きました。

高校に入学してからは、クラシック音楽の好きな友人と互いの家でレコードを聴き合ったりしてその裾野を少しだけ広げたような気がします。1975年4月、渋谷に本部のある大学の理工学部化学科(千歳鳥山校舎)に入学し「古典音楽研究部」というサークルに入部。いわゆるクラシックのレコードをチーム毎にテーマに沿って聴くといった活動で、終わってからのコンパが楽しくて参加していました。1年の夏休み明けから大学がつまらなくなり、その年の秋にフィルハーモニー合唱団、通称「フィル唱」に入団。メンデルスゾーンの傑作オラトリオ「エリヤ」公演の舞台に立つため3ヶ月間参宮橋の青少年オリンピックセンターで練習し、本番は合唱団が東京交響楽団を雇って東京文化会館で開催されました。バリトンの岡村喬生先生、テノールの鈴木寛一先生、ソプラノの曾我栄子先生等豪華なソリストとの共演で学生時代の大きな思い出です。この活動がたり1年生で早々留年が決定。入学5年目の卒年次は、生物有機化学を専攻してDNAに関する基礎研究のため夜遅くまで研究室に残って研究と卒論に集中しました。卒業後は専攻上製薬会社や化学工業の会社に就職するのが主流でしたが、私にはそのような会社は合わないと思っていたので、結局1980年3月の卒業式までに就職できず、4月からは荻窪にある「新星堂」本店でアルバイトをして凌ぐことにしました。その間新聞求人欄を見ていて最初に目に留まったのがミリオンコンサート協会の広告で、早速面接に行きました

がもののみごとに不合格。新星堂は7月末に辞めて真剣に就職先を探し始めました。

梶本音楽事務所の求人広告

その年の夏に新聞求人欄を見ていたら、「音楽のお好きな方」という見出しの梶本音楽事務所の広告を見つけ面接に行きました。そのとき東京事務所所長だった薮田益資さんが面接官で、「好きな演奏家は誰? 音楽雑誌は何を読んでるの?」とか関西弁?でいくつか質問され、その日は会社に連絡先を伝えて帰宅。一週間後に事務所から再面接の連絡があり、当時の社長梶本尚靖さんとの面接で最終的に入社が決まりました。丁度その日、朝比奈隆先生がブルックナーの交響曲第7番を目白の東京カテドラル大聖堂で演奏するので、薮田さんから「聴きに来てもいいよ」と言われて喜びましたが、その後「会場の椅子並べや終演後の椅子の撤収を手伝ってね」と言われ、後からこういうのが梶本流なんだと思いました。ブルックナーを教会で聴くのが初めてだったのでとても感動しました。このような訳で1980年9月に正式に入社、人生初めての就職先が梶本音楽事務所でした。

錚々たるアーティストと仕事

入社当初は、右も左も分からぬ状況で電話は常に鳴りっぱなし、受話器を取るとチケットの申し込みや問合せ、また主催者やオーケストラの方から電話が掛かって来て訳が分からず対応が大変だったのを覚えています。でも思い返すと、ここで人生の中で多くを学んだような気がします。梶本時代にアテンドした主なアーティストと団体は、イングリッド・ヘブラー、コチシュ・ゾルタン、ラドー・ルプー、シューラ・チェルカスキー、クリストフ・エッシュエンバッハ、シロモ・ミンツ、ピ埃尔・アモイヤル、エリー・アメリカンク、ピーター・ゼルキン、パイヤール室内管弦楽団、エンパイア・プラス・クインテット、ウィーン響、ボストン響、チューリッヒ・トーン・ハレ管、モントリオール響、タピオラ合唱団等いくつかの少年少女合唱団とツアーに行き、クラシック界を代表する錚々たるアーティストと一緒に仕事ができて光栄に思っています。



ホロヴィッツ公演、5万円

次はマスコミで社会的事件とも言われ、梶本時代で特に記憶に残っているウラディミール・ホロビツのお話です。

1983年5月の連休後突然アメリカのマネージャーからテレックスで「ホロヴィッツが日本に行ってもいい」という連絡が入りました。その時の事務所の驚きようは大変なもので、6月上旬に西海岸のサンフランシスコでホロヴィッツのリサイタルがあり、その後日本に行けるかもしれないということで、オファーを受け入れるかどうか短時間での返事を要求してきました。余りにも急なオファーでしたが基本的に受け入れ、契約のため社長の梶本尚靖さんと外信部長の梶本眞秀さん(現社長)がニューヨークに赴き奔走しました。肝心の演奏会場ですが、公演の採算のことを考えると席数の多いNHKホールしかないということになり、所長の薮田さんがNHKに電話してみましたが空いてないのは当然でした。しかし内密に「ホロヴィッツ」の公演と伝えたらさすがのNHKも決まっていたスケジュールを動かす努力をして、NHKホールを2公演分押さえることができました。普通ではあり得ないことだと思います。公演まで1ヶ月しか日程がなかったので、毎日終電まで準備に追われました。一方で本当に公演が成功するのか、集客は大丈夫なのかみんな心配をし始め、そんななか社長が残業しているみんなの前にやってきて「心配しないでも大丈夫、これで失敗しても芦屋の家を売るから」と言ってくれたのには驚いたというより、私は社運を賭けている社長に尊敬の念を覚えました。しかしそんな心配はすぐにふっとび、事務所ビルの上空をマスコミのヘリコプターが舞うチケット発売日当日、NHKホール2公演分の最高額5万円のチケットから1万円の学生券まで即日完売しました。経費が一晩1億円以上かかってたと聞きましたから高額でも仕方無かったと思います。当時高額チケットと言ったら、マリア・カラスの8万円が最高額でした。

大きな転機を迎える

公演当日の演奏はミスだらけで、薮田さん曰く、「お客様に文句を言われるのではと心配したがみんな満足した顔をしてロビーに出てきた」と言っています。やっぱり、ホロヴィッツにはオーラがあったんだと思わざるを得ません。実際私はNHKホールの最上階の壁の前で立って聴いたのですが、本当に他の演奏家とは音が違う、未だにその音が耳に残っています。音が立体的でクリスタルで減衰しない、これまでに聴いた事がない特別な音でした。NHKでもテレビ放送され、公演を聴いた評論家の吉田秀和氏が「ひびの入った骨董品」と評して物議を醸したのは有名な話です。いずれにしても梶本音楽事務所は、ホロヴィッツを招聘したことで大きな転機を迎えることになったと思います。後日談で

すが某週刊誌の記事で、ホロヴィッツで大儲けした梶本音楽事務所の社員旅行が「ハワイ」と書かれましたが、実際は2泊3日の北海道でした。

他に梶本主催で特に印象に残った演奏を紹介すると、数ある中でルドルフ・ゼルキンのシューベルトの即興曲(東京文化会館)のアンコール、それから1985年のジェシー・ノーマンの初来日リサイタル(昭和女子大学人見記念講堂)公演です。天上から舞い降りる神懸かりの声がホールを包み込み、拍手が20分間鳴り止まなかったのが印象に残っています。梶本の主催公演以外では、1981年のミラノ・スカラ座クライバーの「オテロ」(NHKホール)と「ボエーム」(東京文化会館)、それから今でも音楽ファンに語り継がれていますが、1985年のバーンスタイン指揮イスラエル・フィルのマーラーの9番(NHKホール)の公演は忘れることができません。

10ヶ月間のヨーロッパ放浪

1985年12月末足掛け6年お世話になった梶本音楽事務所を円満退職、理由は父の会社を継ぐためでした。気仙沼に帰ると恐らく何もできなくなると思い、父に「1年間だけ猶予をください」と言って、1986年3月から12月まで10ヶ月間ヨーロッパをひとりで旅行しました。

イギリスを皮切りに、フランス、スイス、イタリア、ギリシャ、オーストリア、ハンガリー、スペイン、西ドイツ、チェコスロバキア、東ドイツ、オランダ、ベルギー、ルクセンブルク等を旅し、このとき私は30歳でこれが人生初めての海外旅行でした。長期間の旅なので金銭的な余裕はなく、「河童の覗いたヨーロッパ」を片手に安宿を探しながらの放浪の旅でしたが毎日毎日が充実していたような気がします。1日の予算は、宿泊代、食事代、交通費、その日のコンサートや美術館の入場料をすべて含めて1日約5千円程度で、また1日の生活は今思えば贅沢ですが、昼は美術館や歴史的建造物巡りで夜は演奏会という日々でした。このヨーロッパ旅行で印象に残った演奏会は、ロンドンで聴いたジュリーニ指揮ロンドン・フィルのフォーレのレクイエム、ウィーンでは国立歌劇場の「カルメン」(演出:ゼッフィレルリ)で、アグネス・バルツァーのタイトルロール、ホセ・カレーラスのドン・ホセの公演が特に印象に残っています。ミラノではスカラ座の「アイーダ」で、タイトルロールが林康子(マリア・キアーラの代役)、特にラダメスのパヴァロッティの声が見事でした。それとラヴェンナで聴いたラローチャのピアノ・リサイタルも。まだまだ印象に残っている演奏会がありますがこのくらいにします。



気仙沼に帰り漁船の塗装

1986年12月にヨーロッパ旅行から帰国し、翌1月から気仙沼の父の会社で働き始めました。父は塗装工事会社を営んでいて、地元の造船所で漁船の塗装工事が主な仕事です。ここでは梶本音楽事務所で学んだことが活かされました。つまり数字に真剣に向き合うということで、当然ながら会社で使用する材料の仕入れ価格や銀行の借り入れ金利は会社経営には大事なことなので、梶本流かどうか分かりませんが交渉の末それらを下げるることができました。しかし一方で厳しい現実が根を張っていて、漁業関係の業界の工事終了後の支払いは現金で支払いされることはあるで、ほとんどが約束手形での支払いだったのです。しかも手形のサイトは12ヶ月があたりまえで、24ヶ月の手形で支払いされたこともあります。これでは、自転車操業になるのは目に見えていて、実際会社がそうなる直前になっていたので悩まされました。出来るだけ早く銀行の借り入れを返済しようと努めて数年で銀行の借入れを完済しました。

ユーラシックを設立

なぜ音楽業界に戻ってきたかといいますと、2000年に父が亡くなったのが大きな理由のひとつです。地方は東京が不況になってから2~3年の時間差があるようで、当時の不況の影響が地元に表れたのは2001年頃からです。取引先の造船所や漁業会社数社が倒産し始め、2001年から2003年に受け取っていた合計するとかなりの金額の約束手形が次々不渡りになって、瞬く間に経営が赤字に転落しました。会社の役員でもあった母に相談したら、「もう会社を止めても良い」という許可が得られて2004年2月末に塗装工事会社を廃業しました。今後どんな仕事をするか考えましたが、これまで音楽の仕事しか経験がなく冒險でしたが音楽事務所を始めようと一大決心をしました。音楽業界から20年近く離れていたので、マーケティング・リサーチも兼ねて2004年7月から12月まで6ヶ月間ヨーロッパに長期滞在し、シューベルティアーデ、ザルツブルク音楽祭や3ヶ月滞在したウィーンで約120回演奏会を聴きました。この時の経験が、ユーラシック設立後に大きく役立っていると思っております。特に、シューベルティアーデはヨーロッパ中から音楽好きが集まる私のお気に入りの音楽祭で、2005年と2007年にも訪れました。

2005年3月東京にユーラシックを設立しました。所属アーティストがいなかったので、1年以上まったく仕事がなく毎日事務所の天井を見つめるだけでした。そこで自らプロデュースしないと何もできないと思い、最初に企画・主催したコンサートが、浜離宮朝日ホールと共に2006年の6月から12月まで半年かけて開催した「コンサートマスターの風貌」全6回シリーズの演奏会です。普段オーケストラのコンサートマスターを務めるヴァイオリン奏者

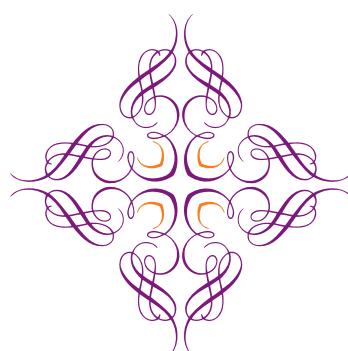
が無伴奏リサイタルを行う企画で、都響の山本友重さん、東響の大谷康子さん、東フィルの荒井英治さん、新日本フィルの豊嶋泰嗣さん、BCJの寺神戸亮さん、東京シティ・フィルの戸澤哲夫さんの皆さんに出演していただきました。豊嶋さんの回にNHK FMのベスト・オブ・クラシックの収録があり、また音楽誌でも少し話題になりましたが、なにより嬉しかったのが某新聞社文化部の記者に、「室内楽では今年いちばんの企画」と褒められたことです。これがユーラシックの旗揚げ公演で、金額は言えませんけど大赤字になりました。しかし事務所の特徴を出さないといけないと思い宣伝費のつもりで割り切りました。

必死に探し始めた

いま弊社で人気のあるアーティストのひとりがアーニャ・イブラギモヴァというヴァイオリニストです。彼女と出会う前から若い才能あるヴァイオリニストを招聘したいと考えていて、2004年夏にザルツブルク音楽祭で偶然聴いたのがヴァイオリンのパトリツィア・コパチンスカヤです。これまで見たことがないくらいの内に秘めたテンペラメントは衝撃的で、ぜひ招聘したいと思い2015年5月に彼女のマネージャーに会うためベルンまで行きました。残念ながら弊社でのマネジメントはかないませんでした。そんなこともあり必死に才能あるヴァイオリニストを探し始め、その中で私がたどり着き興味を持ったのがアーニャ・イブラギモヴァでした。実際2008年秋にバンクーバーまで彼女のリサイタルを聴きに行ったら予想通りの見事な演奏で、3年後の2011年11月に招聘が実現しました。他にヨーロッパに行って探してきたアーティストは、ピアノのポール・ルイスとフランチェスコ・トリスター、それからチェロのアリサ・ワイラースタインです。基本的にヨーロッパに行って演奏を聴いてから招聘するかどうか判断しています。それから、まだ来日したことがない若いアーティストに注目しています。

ユーラシックを設立して今年で13年目になりますが、皆さんのお蔭で継続できていると思っており感謝しております。

2017年12月22日(金) 東京文化会館小会議室1にて





私の仕事の経歴

手づくりコンサート 30 年 税金使わず会員制度やセット券

横浜楽友会・鶴沼室内楽愛好会代表 平井 満



私は、湘南学園という中高一貫校で教師を 40 年やっていまして在職中から音楽会を作る、ということを続けています。今日は、そんな音楽会のことをいくつかお話したいと思います。

1990 年、「鶴沼サロンコンサート」というのが始まりました。レール・ブランシュというレストランが開業するにあたって企画されました。サロンコンサートとして 30 年近く続き、現在で 370 回ぐらいになり、ずっと続いています。

私は 2010 年の定年まえから、その先何をやるか考えていたのですが、2008 年に朝日新聞夕刊に吉田純子さんが「鶴沼サロンコンサート」を取り上げた記事が載ったのです。当時の館長さんがそれを見て、私が音楽をやっているのを知り「ひまわりの郷」でも何かできないか、ということになりました。

「お客様が集まらない」は思い込み

横浜市は全区に区民文化センターがあります。青葉区のフィリア、栄区のリリス、磯子区の杉田劇場、泉区のアトルフォンテなどなど、いずれも 300 人から 500 人のホールで、初めはそれぞれにコンセプトをもたせてつくられました。杉田劇場は大衆演劇、アトルフォンテは芝居などなどで、ひまわりの郷やフィリア、リリスは室内楽専用ホール。しかし、その後指定管理制度が導入されて、変わっています。

当時、区民文化センターでは、クラシックは年間 2 本、大衆芸能は何本、お子様向けが何本、そういう決め方して、企画が金太郎飴化してしまいました。当時の指定管理者は、適当に業者からパッケージを買って単発主義で凌いでいたのです。

あるとき、80 席しか売れなかった公演が問題になりました。しかも年 2 本のうちの 1 本が予算を食いつぶしてしまったという状況でした。困った末、「なんとかならないか」ということになったのです。

そこで、どうやってお客様を固定化させるかという話になりました。そのとき私が提案したのが、年間 4 回から 6 回のシリーズにするのがいい、それが難しいのなら、会員制にするとかセット券で販売するとか。ところが、現場の人たちは「とんでもない」と言うんです。「2 本でも大赤字になるのに」ってね。

「クラシックでは絶対にお客が集まらない」というのは、思い込みです。シリーズ化すれば、一定のお客はついてくる。2008 年から、「リスクは負うから」ということで、セット券で始めたわけです。定年が過ぎればある程度の退職金があるので、腹をくくったのです。内心は若干でも黒字がでればいいかなと思っていました。

最初にやったのがヴァイオリンの前橋汀子さん。チゴイネルワイゼン等の名曲リサイタルをやったら 1 週間で 380 席が売り切れました。それが、「ひまわりの郷コンサートシリーズ」です。

成功するためには、簡単に言えば、なるべく簡略化して値段も低く設定して、セット券で買ってもらうのがいいと思います。コンスタントに 300 人は来てもらいたい。もちろん目玉の公演はつくるにしても。チケットの値段も思いきって安くしました。3 公演 10,000 円。1 公演だと 5,000 円。そしてセット券で買った方が良い席が取れるという仕組みを考えました。2 階席の値段を下げたほうが良いという意見も出たのですが、均一料金で単純化する。後方席は買ってもらわなくともいい、と割り切ったのです。10 年ほど頑張って、目標の 300 席はクリア出来るようになりました。当初は音楽事務所には出演料を負けてもらったりしましたが、おかげさまで、このところ集客も安定するようになって、赤字にはならないようになってきました。ここ 5 年ぐらいは、順調にやっています。

100 席のホールで 100 回以上も公演

次はサルビアホールの話です。

2011 年、鶴見区にサルビアホールが出来ることになりました。予定では建物の地上 4 階、550 席の多目的ホールで、鶴見公会堂の老朽化のための建て替え計画という意味もあったのですが、「900 席のホールを閉鎖するのに 500 席のホールとは何事だ」という意見もあって、急遽変更して舞台から客席までを真っ平らにして 700 席ぐらい入るようにして、移動式で椅子が出る仕組みのコンサート会場としては使い勝手の悪いホールになっちゃったのです。そして、今度は音響が悪いというので音楽関係者からクレームがついたので、スタジオにする予定だった場所を吹き抜けにして、永田音響さんに頼んで 100 席のホールを別に作つたんですが、これが「瓢箪から駒」で、音響の素晴らしいホールができた。でも、控え室が少ないとか、導線が悪いとか問題も多々あります。



とにかくホール自体は 100 席ですが、いい会場が出来た。館長さんから連絡があって、行って見たら、確かに響きの良い会場なんです。で、「どうしていいかわからんが、何かできないか」と相談されて。内覧のときピアノを見せてもらったら、それがひどかった。市の予算が無いなどいろいろな事情で、結果的に入札で安いのを買っちゃったらしいのです。

ということで、ここでは「ピアノなし」で出来るモノは何かと。私が思いつくのは弦楽四重奏か古楽くらいしかない。とにもかくにも、まずは年間 6 回のシリーズをサルビアホールで始めたのでした。

ところが、2011 年 3 月にオープンのサルビアホール。4 月からのシリーズ第 1 回目がチェロの鈴木秀美さんとヴァイオリンの佐藤俊介さん。ハイドンの「十字架上の最期の 7 つの言葉」でした。因果関係はないと思いますが、結果的には 3 月 11 日の大地震でもう大変でした。

そんなこんなで始めて見ると、古楽の方は回を重ねると、どうしてもチェンバロが必要になってくる。古楽ではお客様も集まらない。ということで、今は弦楽四重奏だけです。通算で 100 回以上続いています。

大ホールは 1,500 円

最後は、海老名のシリーズです。

大ホールと小ホールがあるんですが、いずれもクラシックでほとんど使われていない。地元の方々と私が運営委員会をつくって始めました。

お客様を集めるのが大変な地域、しかもチケットは安くないと入らない、出演者は有名でないと入らない。問題山積みの環境です。

ここでの作戦は、大ホールで有名人を起用することで黒字を出して、小ホールの赤字を埋めることにしました。

大ホールで仲道郁代さん、小山実稚恵さん、チケット代は 2,500 円と 1,500 円。これで 1,000 人集める。ホールが全面的に協力してくれて、使用料金なし、宣伝も手伝ってくれる、チケットの販売も手伝ってくれることになりました。

そんなこんなで 10 年近くやってきて、ここへきて小ホールも売れるようになってきました。プラジャーク・カルテットが 300 席売れ、段々と個々のコンサートで赤字を出さないようにになってきました。

文化と街づくり叢書を執筆

『音楽の友』で連載をしていた渡辺さんが鶴沼やサルビアを取材してくれて、そのなかで「サロンもいいけど、もうちょっと大きなところも紹介したい。地方で民間で頑張ってるところを紹介できないだろうか」という話があり

まして、水曜社という出版社が「文化とまちづくり叢書」シリーズという企画のひとつとして活かせるから、ということで本を出す話が持ち上がりました。

当初、内容を決める議論をして、「地方の音楽界の状況はどうなのか。きびしい状況下でどうやっているのか…」というのを取材を通して紹介して行こうということになりました。

歴史的には、バブル前後、つまり景気の良い時代には自治体の文化予算が潤沢で、公共ホールは主催公演を沢山やっていました。補助があるから、東京で 15,000 円の公演を 8,000 円のチケット料金で出来るのです。どこもかしこも。公共のコンサートチケットが安くなると、地方で頑張っていた興業主やプロモータがやって行けなくなり、壊滅してしまいました。自治体が安い値段でやつたら勝負になりません。地方の公演が次々と消滅してしまったのです。皮肉な事に、そんな中でもコンサートを企画する民間として残っているのは、自治体が熱心で無いところ。ホールだけ建ててあとは知らない、というところが多かったのです。やり手がないから、自治体がやらないから。そういうところを、おもに取材させてもらったのです。

市や県が熱心でないから生き残る

茅ヶ崎市や米子市で頑張っている人がいます。どちらの市も文化政策には予算を出さない。現場で頑張っている人たちがいてうまくやっているようです。くどいようですが、皮肉にも市や県が熱心じゃないから生き残っているのです。時期的には木更津市が早かったのですが、民間の主催者として成功している例として、葉山も取り上げました。

「葉山室内楽鑑賞会」は二十数年前に始まりました。始めた方はある意味発想の豊かな人で、当初、会員は 12,000 円、つまり 1 ヶ月 1,000 円で年間 4 回のクラシックを、というユニークな企画でした。しかも会員の集め方が大胆なのです。初年度の新聞広告で、翌年にはペーター・シュライヤー、再来年はウィーン弦楽四重奏団と、先々の公演もほのめかして会員をかき集めて始めちゃう。でも、実際はそんな公演は実現出来なくなって、にっちもさっちもいかなくて。最後には、どなたか手伝ってくださいと言って逃げちゃったんです。そんな危機的な状況の中で助っ人として活躍して最終的に事務局長になったのが、山脇利雄さんです。元 JAL のパイロット、責任感ある方で、このとき最終的には自分で腹をくくれば、ということで引き受けたんですね。さすがにペーター・シュライヤーは出来なかったんですが。

そんなことがあって、山脇さんに信頼が集まって、結果的には会員が 500 人に増えたのです。

宣伝は 3 年にいっぺん。新聞折り込みをするだけ。そ



れを見た人だけで会員枠は完売。そういうかたちで一昨年まで続いたのですが、山脇さんも80歳を過ぎて大変です。しかも、葉山の町が価値を認めないから、ホールの確保も苦労したようです。

町も価値を認めて

外来アーティストだと1年前、1年半前に準備しないと呼べないから、「ホールとれると思うけど、それなかったらごめんなさい」なんてことも。

会場の予約は半年前からの先着順ですから、予約開始時には、山脇さんご自身が自動車で前日の夜から泊まり込んだり。3年前に、「もう、体力的にできない。今年いっぱいでやめる。終わりにしたい」ということで、いったん中止になってしまいました。

人の社会というのは不思議なもので、そうなると今度は町の人たちから、「もったいない、なんとかならんか」という声が上がり、会員だった人からも、町に声が集まり、寄せ付ける人も出てきました。

「葉山室内楽鑑賞会」というのが価値があると理解されて、急遽、町から山脇さんへ、なんとかならないか。という訳です。山脇さんが表彰されたり。

また、刺激を受けて新しく活動するという人も出てきました。結果的には、葉山町が共催になり、2年、3年先でも会場の確保ができるようになって、会場費も半額になることに。

そしてついに、「再開できないか」となり、新しい運営委員が募られて、峰松さんが自分の家を事務所として提供してくれることで動き出しました。

山脇さんは顧問として残っていただいてます。朝日新聞も好意的な記事を出してくれました。

今年の4月から活動を再開。私も手伝ってほしいと言われ、とりあえず、3年間は加わることにしました。

新聞折り込みもやって、継続案内の手紙を420人まで減っていた会員に送りました。結果、400人近くの継続希望が来ました。今は、定員の450人集まって。30人ほどウェイティングが出るほどになりました。町の方針で、会員だけでは困るということで、50席は1回券を売るという扱いで、活動が再開しました。

浮いた金でアウトーチ

会としても町に貢献しようということで、アウトーチを年1回やることにしました。仲道郁代さん、青木尚佳さん、ベルチャ・クアルテットなどを予定しています。葉山は再開できる状況になった、というお話です。

そんな感じで、私も、いろいろやらせていただいて、お

役に立てたかなと思っています。基本的には我々は税金使わないで、どうやってコンサートをやるか、会員制度とかセット券を、どうやって活かしていくか、というのがポイントだと思います。現実問題としては、正直なところ大変な仕事です。震災の時のようなリスクがあると2011年のときのようにアーティストが来なくなる。そのときは代役を立てたり、内容を変更してお客様に勘弁してもらうように努力しましたが、2、3割はキャンセルが出来ますから払戻しの分は貯めておかなきゃならない。鶴沼も、ぎりぎりセーフでしたが。民間は、そういう裏付けはないので、そんな時のための準備はして置かないといけないです。

苦労多い民間のコンサート企画

以上のように、民間でのコンサート企画は、やりようによつては続けることが出来る例を挙げましたが、しかし、これで生活するのは難しいと思います。私も年金や退職金とかの助けがあって、なんとかやりますけど。他の方達の話を聞いても、みなさん大変苦労して、ボランティアの方も多いです。ホール・スタッフも学生を雇ったりしてますが、ボランティアの方達に手伝ってもらったりです。

公共団体や公共ホールの人たちにも、こうした活動への理解が広がって、よりよい関係づくりに進めばと願っています。

2018年6月15日（金） 東京文化会館小会議室1にて

クラシックコンサートをつくる。つづける。
—地域主催者はかく語りき

平井 満・渡辺 和 共著
A5版 192頁 2,700円

図書出版：水曜社





私の仕事の経歴

独自企画で可能性を追求 すみだトリフォニーの新しい挑戦

すみだトリフォニーホール プロデューサー 上野喜浩



人生 100 年と言われている時代に、半分の齢に達してしまいました。まずは自身の話をします。

父は自動車会社でエンジンの設計を生業にしていた、母は武蔵野音楽大学の声楽科で松本美和子さんと同級で、ピアノを教えていました。そんなわけで、家の中ではいつもピアノが鳴っていました。自然と母からピアノを習うことになるのですが、練習もせずに満足に弾けないと叱られて、泣いて抵抗していました。すると父はなんで男に無理にピアノをやらせるんだ、と。で、しばらくレッスンがなくなってしまった。またしばらくすると再開する、なんていうことが中学生ぐらいまで続きました。これでは満足に弾けない訳ですね。

中学時代に 1,000 枚のレコード

中学になって、レコードを聴くようになりました。

級友の父親がクラシックファンで彼の部屋はレコードでいっぱい。あまりの数の多さに、何を所有しているかどうかもわからくなり、ダブって買ってしまう、というのが良くあるようで、そんなダブったレコードを私に提供してくれるようになったのです。全部で 1,000 枚ぐらいあったでしょうか。かたっぱしから聴きました。これが音楽鑑賞歴のスタートでした。

高校になると合唱のクラブ活動に参加するようになりました。男子校だったので、普段は男ばかりの練習ですが、週末に女子部との練習があって、毎回楽しみだった思い出があります。夏はコンサート、冬はオペラと楽しくやっていて、中学終わりからフルートでオーケストラにも手をつけるように。学校ではプラスバンドがなくて、付属の大学オーケストラへ。皆さん良くご存じのことでしょうが、フルートは人数が、めちゃめちゃ多い。けれど、高校 2 年で最初にステージに乗り、レギュラーになって、嫉妬心からいじめられそうな環境でも先輩が助けてくれた、なんてこともあります。

大学付属の高校だったので、そのまま進学というコースもあったのですが、私としては音楽に係わる勉強をしたい。ということで、武蔵野音楽大学で音楽学を学ぶことにしました。しかし、石田一志、武田明倫という大先生達の講義になかなか興味が持てず、授業はつらかった。また音大に来たら、友人たちも音楽好きだと思ったのに、彼らはコンサートはほとんど行かず、先生のチケットを義理で買うだ

けです。

結局中退して、半年ふらふらすることに。そんなときに知ったのが裏方の仕事です。尚美学園で、マネジメントの学科ができたばかりでした。慶應のマネジメントもまだスタートしていなかった時期です。

こんなやく座で裏方仕事

そんな学生時代を経て仕事に就くような年齢になりました。最初はオペラシアター こんなやく座に勤めました。私の役割は学校の鑑賞教室、たとえば宮澤賢治の「セロ弾きのゴーシュ」などの定番の作品を全国の学校に電話して売る。営業の仕事です。また、劇団員といっしょに、車に乗って学校廻りもしました。1 年ぐらい、そんな経験を積みました。

次に勤めたのが音楽事務所です。やはり現場で働きたいという思いが強く、東京アイエムシーに入社しました。当時、ミシェル・ダルベルト、ジャン＝マルク・ルイサダ、ケビン・ケナーなどの名ピアニストを招聘していた会社です。

ここでは先ず、海外の少年少女合唱団に携わりました。自治体や教育委員会が主体となって全国各地の少年合唱団と共に公演させる、という公演が流行っていた時期です。全国各地でホームステイの世話もしました。子ども達と地元の方達が互いに情が移って泣きながら別れたり、ホテルでもチェックアウト時にホテルの従業員に一曲披露するとか、広島に出向いたときは、平和記念公園の前で一曲歌うとか、音楽を身近に感じられる体験を数多く得ることが出来ました。東京アイエムシーは小さい会社ですので、営業、チケット、随行と、ひととおり経験すること 4 年半、良い経験ができました。

『音楽の友』の広告でホールに

28 歳の時、アーティストを成田に送って、その帰路にたまたま『音楽の友』を買って電車に乗ったのです。偶然見つけた広告にあったのがトリフォニーホール職員募集です。しかも締切りが、それを見つけた翌日でした。すぐに電車を乗り換えて墨田区役所に向かい、募集要項を受け取りに行きました。翌日、締切りの日ぎりぎりで提出です。

筆記試験は一般の公務員とほぼいっしょの内容だったと思います。数学、英語、一般教養など。合格して、次は面接。部屋に 8 人ぐらい受験者が居て、結果そのうちの 5 人が



採用されました。もしかして、事前に決まっていた人もいたのかな。と思いました。

1996 年の 4 月からの勤務です。トリフォニーホールは 97 年の 10 月竣工でしたのでその約 1 年半前に財団ができたことになります。

能力と情熱のすべてを傾ける

話が前後しますが、国技館が蔵前から両国に戻った 1985 年。「5000 人の第九」という企画を行いました。国技館オープン記念のイベントです。指揮は石丸寛、土俵の上のオーケストラは初回は東京交響楽団、2 回目は新日本フィルと合同、5 回目ぐらいから新日本フィルだけになったと記憶しています。コーラスは、向島の芸者さんや地元の人など。テレビや新聞のニュースでも大きくとりあげられ、墨田区としては大成功のイベントとなりました。こんなこともあって、新日本フィルと墨田区の関係が近づいて行なったのでしょうか。

2018 年が、墨田区と新日本フィルがフランチャイズ契約を締結して 30 周年です。トリフォニーホールが出来てからは 21 年ですから、その 9 年前の 1988 年、墨田区と新日本フィルは契約したことになります。その覚書きには、「墨田区と新日本フィルは芸術文化の限りない進展に寄与し、(中略) 共に持てる能力と情熱のすべてを傾けて協力し合うことを約束する」という件があって、私はこの一節が大好きです。当時、お互いに大きな夢を抱いていたのだ、ということがはっきり分かる文章です。後半には具体的な事業内容も書かれています。もちろん、トリフォニーホールが完成することが前提の覚書きです。

当時全国で 600 以上の公立ホールが新設されるなか、ホールにアーティストを住まわすというのは画期的なことだったと思います。箱物行政と批判されがちなハード先行の業界で唯一といつていいソフト先行だったのです。

墨田区と新日本フィル

1989 年から新日本フィルは墨田区のなかでの活動を積極的に展開してゆくことになります。まずはアウトリーチ、当時は「出前コンサート」と言っていました。体育館でオーケストラが演奏するのです。93 年からは新日本フィル団員による音楽の授業も行っています。これは「今度引っ越してまいりますのでよろしくお願ひします」と新日本フィルの広報活動の一環でもありました。

ここでちょっとデータを示します。トリフォニーホール年間全利用日数 311 日のうち、新日本フィルが 152 日利用しています。とても多いですよね。本番、リハーサル足した数ですが相当な日数です。設計の段階で検討していたリハーサル室だと位置の関係から客席の座席数が減ってし

まうということにつながり、結果的にステージでリハーサルすることになったようです。設計時に音楽関係者に本音を言わない行政担当者が多いと聞きますが、墨田区は新日本フィルの事務局と徹底的にコミュニケーションを重ねたことで、オーケストラにとって使い易いホールができたのだと思います。

バックステージでも、オーケストラが使いやすいように様々な工夫が施されています。オーケストラの事務所、楽器庫、楽員のロッカーリ、搬出入のしやすさなど、きめ細やかな設計になっています。オケが住むべくして作られたホールです。

新日本フィルの公演回数は、財団主催が 10 回、新日本フィル主催 32 回、そのほかニューイヤー、サマーなど 6 回、小ホールの室内楽。久石譲さんのコンサートなどなどが加わると 60 回ぐらいになります。

アウトリーチは前述のとおりオープン前から区内全 36 校の公立小中学校。演奏を中心のコンサートを実施しています。それ以外に区内の高齢者施設、障害者施設、病院など 20 回ぐらいアウトリーチを。2005 年からはジュニアオーケストラも創設されました。新日本フィルと同様にステージで練習。オケのメンバーが指導しています。

ブリュッヘン、コープマンそしてサマーコンサート

特徴的な企画として、一人の指揮者が海外の自分のオーケストラと新日本フィルを振るという企画があります。ブリュッヘンとコープマン両巨匠とも、それぞれ 18 世紀オーケストラ、アムステルダム・バロック管と手兵のオーケストラを引き連れて来日し独自のプログラムを、さらに新日本フィルとの共演の機会を設けました。先日、終わったばかりのコープマンとの共演はバッハの管弦楽組曲とブランデンブルク協奏曲。どちらも編成は小さいのですが、いい意味で緊張感のあふれる充実した名演になりました。

最後の来日となった 18 世紀オケの 3 公演は完売でしたが、最終日での新日本フィルとの共演は 500 枚ぐらいしか売れませんでした。音楽ファンからみれば、高くて 18 世オケのほうを買うのは仕方ないことです。ブリュッヘンがインタビューでこう言いました。「私のもっとも愛する二つのオーケストラ、それは 18 世紀オーケストラと新日本フィルだ」と。優劣をつけるのではなく、それぞれの個性を楽しんでもらいたい。私たちは新日本フィルにそういうオーケストラになってもらいたいと思った瞬間でした。こういう企画も、こつこつと続けて行きたいと思います。

次はサマーコンサートです。舞台上にコンテンポラリーダンスの振付師、鈴木ユキオ氏の協力を得ていろいろな経歴の墨田区民のダンサーが新日本フィルと共に演しました。

新日本フィル音楽監督の上岡 敏之さんは、墨田区の人

たちがオケと共に演ずる企画を積極的にやりたいとおっしゃってくれますが、私としては気になることもあります。それは公演の質です。「贅沢な発表会」ということなら、チケット代金とて行うのはいかがなものか。実際に作る側の私たちにも不安でした。全員プロだったら、違うステージになるだろう、と。しかし、それは杞憂でした。実際、公演を終えて素晴らしい公演を創ることが可能なのだと確信したのです。

来年はプロコフィエフの「ロメオとジュリエット」を墨田区内の高校の演劇部と一緒にやりたい。台本も衣装も、演出も高校生にと、上岡氏からの提案が出ています。

区民の人たちが「私も新日本フィルと共演できるかも知れない」という可能性を感じさせる企画だと思います。

音楽のバリアフリー

バリアフリーと言う、ハード面で使われることが多い言葉ですが、ソフト面でのバリアフリーの話をします。

公演には5つの重要な要素があると考えています。それは、内容、入場料、会場、鑑賞の環境、開催時期。クラシック音楽はハードルが高いと良いわれますが、それぞれのハードルを低くすること、が重要なのではないかと思います。最初のふたつは名曲で格安で、とすぐ思いつくのですが、その他が大事です。

公演内容は鑑賞者と出演者両方の立場にたって考えます。前者では初心者、高齢者、障害者、外国人など。後者では、アマチュア、学生など、それぞれに応じたプログラムや見せ方が必要です。詳しくは後述することにします。

【入場料】

これは安価、無料でハードルは下がります。もちろん単純な招待は、分かり易いのですが、トリフォニーホールでは、転入者招待というのを実施しています。墨田区への転入者は年間約二万人。全員が招待の対象です。区役所で転入時にガイドブックなどを配るのですが、そこに招待状とチラシを入れています。

地域への関心がいちばん高い転入時に、私たちの活動を知つてもらおうということです。来場者はどんどん増えています。墨田区は外国人も多いのですが、家族連れで来てくれます。

もう一つは新成人の招待。区内の小中学生は鑑賞教室で全員オーケストラを聴くことになるのですが、高校は区立ではないのでコンタクトがとりにくくなる。大学はなおさらです。そこで新成人を招待することにしました。新成人を迎えるのは毎年だいたい区民の4~5パーセントですが、利用が高まればいいと思っています。それぞれの空席の活用にもなっています。

次は割引です。区民の税金を投入して運営しているので、

すみだ区民割を行っています。区民を初心者や初級者に置き換えて考え、その対象にあった内容の公演に割引を行えば大きな効果があります。学割で高校生以下1,000円というのもあります。音楽ファンの親が子どもを連れて来てくれるといいな、と設定しましたが、実際は利用率が良くありません。広報の仕方を工夫しなければ、と考えています。また、区民を対象にした公開リハーサルも行っています。

【会場】

トリフォニーホールは錦糸町駅から徒歩圏と立地は良いですが、墨田区は南北に広く、北部の曳舟や向島などは30分以上かかり、自分の家から近いところで、という要望もあります。それらは区内30カ所の施設を利用したアウトリーチ活動として新日本フィルやジュニアオケで70回ほど実施しています。

【鑑賞環境】

赤ちゃん、障害者、未就学児をメインのお客様として企画しています。つまり、普段ホールには入れない人たちを主役に。客席前方にカーペットを敷いて楽な姿勢でも楽しんでもらえるよう、「のびのびスペース」と名付けて設置しています。障害者施設の方達300人を招いての公演。二階席は未就学児などの利用で、今年で7回目。好評をいただいている。鑑賞するための環境ということで、一般的のコンサートに入れない人たちをメインに、気軽に来てもらえるよう考えながら実施しています。

また、「バックステージツアー＆オルガンコンサート」。たぶん、どこでも行っていると思います。うちは、年間半分が新日本フィルの利用なので、ホールが空いてない。できるだけ多くのお客様に来ていただきたいということで、一般と未就学児、視覚障害、車椅子と対象をしぼった独自のバックステージツアーを行っています。車椅子はアプローチが難しいのですが、一旦オケピットに乗ってもらって、ステージへ上がる、という工夫をしています。

昨年のバックステージでは10名ほどの車椅子の方を対象に設定しましたが、2組4名と少ない参加者でした。それが新聞記事となつたことから、ある民間のホール関係者から電話でいろいろ聞かれて、最終的に「効率が悪いですね」と言われ、腹立たしい思いをしました。

しかし、考えてみれば、これこそが民間ではやらないこと、公立だからできることだと改めて思われました。

オルガンコンサートでは視覚障害者を対象に行いましたが、もちろん多くの盲導犬にも楽しんでもらいました。

また、視覚障害者のためには「新日本フィルの生オケ・シネマ」というサイレントの映画に合わせ、新日本フィルが演奏する企画も実施しました。これは生音にこだわりました。また、音声ガイドを用意。映像を音声に起こしたものを見ながらイヤホンで聴きながら楽しんでいただきまし



た。 充分なケアをするからこそ、トリフォニーホールという素晴らしい環境で楽しんでもらえるのだと思います。

【開催時期】

正月ならニューイヤー、クリスマスならクリスマスコンサート、夏にはサマーコンサートと、定番はどこでも実施していると思いますが、墨田区では独自の企画を設けています。

毎年3月10日、墨田区を中心に8万人から10万人もが亡くなられた東京大空襲のあった日に、平和祈念コンサートを行っています。

新日本フィル音楽監督の上岡さんと、墨田区にとって大切な日の話になり、それは、隅田川の花火、国技館での第9などと。さらに、東京大空襲の日のことに触れると、「そういう趣旨ならドイツにもある、私もこの日に加わりたい」とおっしゃられて、続けています。ロストロポーヴィチがブリテンの戦争レクイエムをスタートした企画が音楽祭の規模まで膨らみました。すみだ郷土資料館では、「空襲体験者によるトーク」も開催されています。

福祉作業所の菓子を販売

墨田区はお盆の時期に人が戻ってくる街です。毎年8月に実施しているのは、まさに区民のためのコンサート。是非、新日本フィルを聴いてもらおうと、下町在住の下野竜也さんにお願いして5年前スタート、続けています。下野さんの舞台でのお話は、分かり易いだけでなく新しい発見のある充実した内容で人気です。コンサートは70～80分と短めですが、区民は1,500円と破格です。会場は、みなさん軽装です。サンダル履きで行けるトリフォニーホール、下町ならではの企画がようやく実現しました。

また、会場では、墨田区の福祉作業所で作られたクッキーやお菓子などを販売しています。産業コーディネーターに依頼して、手にとってもらえるもの、売れるものを創ってもらっています。

ホール独自の企画が重要

1999年、フィンランドの地方都市ラハティに本拠を置くラハティ交響楽団を招きました。初来日です。最初は不安もあり、定番の名曲をやるだけ、という選択肢もあったのですが、シベリウスの交響曲全曲演奏することに。全4日間、交響曲第5番の最終版に加えて初稿版による演奏も披露しました。コアな音楽ファンが喜ぶ内容です。

1,200人ほどのお客様が集まり、びっくりしました。

質にこだわり、ホール独自の企画を追求していくことの重要性を確信しました。

海外の演奏家では、事前にCDで聴いて、ときには海外に聞きに行き、協力者を得て、ピアニストのファジル・サ

イなど、初来日のデビュー公演も行つてきました。

日本では、若いアーティストに人気が集まりますが、年齢を重ねて、来日しなくなったアーティストを改めて、再発掘して聴いていただく、というのを行っています。

2003年、イタリアのピアニスト、アルド・チッコリーニが当時78歳。一日2回公演でした。ところが客席はどちらも300人ほど。しかし、8年10年12年と重ねるうちにお客様が増え、最終的には満席になりました。

チッコリーニの「ステージ上では自分の存在は無くてもいい、音楽だけあれば」と言う言葉をヒントに、氏の了解を得て、アンコールで手だけに照明を当てるという演出もしました。

「当時、ヨーロッパ各地で起こったテロ事件に憂い、晩年に日本の聴衆を前に公演を行うことは自分にとって最大の喜びだ」と語ってくれたのが印象深いですね。

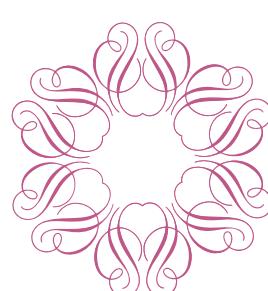
今後も、我が国では忘れられたベテランを探していくたいです。

2006年にスタートした「ゴルトベルク変奏曲」シリーズは、お客様に対するアンチテーゼでスタートしました。チケットを買うとき「誰が」「何の曲を」という順番で決めることがほとんどだと思いますが、「ゴルトベルク」を聞けるのであれば「誰か」はこだわらず、新しいアーティストとの出会いの場としたいと考えたのです。これまでに14回行いましたがそのうち9回は初来日のアーティストでした。「ゴルトベルク変奏曲」曲数にちなんで32回行いたいと思っています。

墨田区民全員に来てもらいたい

まとめることはないんですが、夢のひとつとして、墨田区民27万人、一人残らず、ホールに来てもらいたいです。ひとりひとりに向かい、前述のようなさまざまな音楽のバリアを取り除けば来てくれるのか、これからも真剣に考えてきたいと思います。このホールに来たことの無い、すべてのひとたちへ。以上です。

2018年9月21日（金） 東京文化会館小会議室1にて



音と空間

秋は音楽シーズンなのでいろいろな音楽に出会うことができた。

ネルソン・フレイレ、ボリー

二、ロンドン交響楽団、それに札幌交響楽団の演奏会も聴きに行つた。

サイモン・ラトル&ロンドン交響楽団ではマーラーの交響曲第9番を久しぶりに生で聴いた。

中ではフレイレの演奏が大変素晴らしかった。若いときから注目していたが地味な人だったのであまり人気が出なかつたが、ここにきて評価され始めた。

マーラーは学生時代にバーンスタイル&ニューヨーク・フィルで聴いたのが最初だつたが、以来、9番の第4楽章は葬式の時にかけて欲しいと言つけてきた。

最近は趣向が変わったのか、フォーレのレクエイムなどと言つていて。

それもミシェル・コルボの演奏で、ボイソプラノの演奏にして欲しい。

清貧な演奏でいかにも天に昇るという感じがする。

札幌にわざわざ行つたのは2月の札響東京公演でポン

マーラーという指揮者が、べー
トーヴェンの「田園」と「運命」
を演奏したのが大変強く印象
に残つたからだ。

こんな素晴らしい指揮者と
の契約を打ち切る札幌交響樂
團は一体何を考えているのか
と思った。

そんなこともあり最後にな
るかも知れないと、札幌まで出
かけ行つた。

その演奏は予想通りで、特に
良かつたのがメンデルスゾーンの「宗教改革」。管楽器と弦楽
器のなんどバランスの良い演
奏かと感心した。彼はきっと耳
が良いのだろう。

それと、会場という樂器が音
の出て行く空間に適している
のではないかのか。

良かつたのがメンデルスゾーンの「宗教改革」。管楽器と弦楽
器のなんどバランスの良い演
奏かと感心した。彼はきっと耳
が良いのだろう。

その演奏は予想通りで、特に
良かつたのがメンデルスゾーンの「宗教改革」。管楽器と弦楽
器のなんどバランスの良い演
奏かと感心した。彼はきっと耳
が良いのだろう。



Photo : A. Maruta
Michael Gees and Cristoph Pregardien

中根俊士

その良い空間と音響を持つた。パルテノン多摩大ホールが、老朽化のための大規模改修工事に入り休館になる。音楽ホールとして最適な空間だったのに、演劇ホールに改修されるかもしれない、という話を聞いた。

なんとももつたない話で、またクラシックが遠ざかって行く気がする。

話を聞いた。

音楽ホールとして最適な空

間だったのに、演劇ホールに改

修されるかもしれない、といふ

話を聞いた。

何だ全くいつもと違つてではないか」という印象を持った。白井光子が常に会場について音が出て行く空間がないと言つて、横幅の広い会場よりも奥行きのある会場が良いと言つて、空間が良かつた気がした。

が必要なのだと強く感じた。
プログラム一曲目の「ブラー

ムスが始まった時に、「これは

いか」という印象を持った。

白井光子が常に会場につい

て音が出て行く空間がないと言つて、横幅の広い会場が良かつた気がした。

2019年1月 音楽プロデューサー協会発行 編集:志村嘉一郎 デザイン:梅津知美

音楽プロデューサー協会会員

上野喜浩
梅津知美
江藤昌子
兼岩好江
榑松大剛
黒川浩明
向後由美
小林信一
斎藤茂
佐々木仔利子
志村嘉一郎
高原加代子
寺田有佑
中根俊士
中村由美子
萩生哲郎
橋本伸一郎
原 浩之
平井 满

すみだトリフォニーホール プロデューサー
(公財) 多摩市文化振興財団 音楽プロデューサー
こぶしくらぶ主宰 プロデューサー
オフィス アルシュ 代表
ロングランプランニング(株)
(カンフェティ) 代表取締役
(有) 大阪アーティスト協会 取締役会長
せきれい社 「サラサーテ」編集部
(一財) 合唱音樂振興会理事
OTTAVA(株) 取締役 ゼネラルマネージャー
佐々木仔利子(特)日本室内楽アカデミー 理事長
ジャーナリスト、元浜離宮朝日ホール支配人
(株) ミリオンコンサート協会
日本アーティスト 代表取締役
(株) 東京アーティスツ 代表取締役
リモージュコンサート(株) 代表取締役
ナクソス・ジャパン(株) デジタル事業部
いちべる 代表取締役
(株) 白寿生科学研究所 取締役副社長
Hakuju Hall支配人
横浜楽友会/鶴沼室内楽愛好会 代表

松崎三恵子(株) シド音楽企画 代表取締役
松本京子(有) おふいすべガ 取締役
丸田 朗(有) マルタミュージックサービス 代表取締役
村上雄一(株) ユーラシック 代表取締役
村田 亨(株) テレビマンユニオン エグゼクティヴプロデューサー
藪田益資 クラシック・ニュース プロデューサー
吉井實行(公財) オーケストラ連盟 専務理事

代表幹事 村上雄一
幹事 梅津知美 梶本伸一郎 中根俊士
中村由美子 橋本伸一郎 丸田 朗
監査 平井満
参与 藪田益資
事務局長 橋本伸一郎

音楽プロデューサー協会
〒165-0033 東京都中野区若宮 2-33-5
TEL: 050-3337-7639 FAX: 03-5373-7760
E-mail: info@ichibell.net(株) いちべる 内

2019年1月現在

会報タイトル変更について

会報誌のタイトルを前回より変更いたしました。栄(しおり)は読書の際には大変便利な道具ですが、辞書を紐解くと、ふたつの「干」で「揃えられた様子」をあらわし、削られた「木」の一文字を加えて「みちしるべ」という意味が与えられたようです。音楽をプロデュースする、という世界でも、さまざまな分野で活躍した先達が遺した偉業や現在進行中のもの等々、後世に伝えてゆくべき案内や情報があります。音楽プロデューサー協会の例会で、勉強会などの情報を元にまとめた小紙のなかでたった1行でも、皆さまにとっての「みちしるべ」となればと願い、名付けました。